

老いをあらわすことば

— 試 論 —

遠 藤 織 枝

— は じ め に —

高齢化社会の到来が目前に迫り、日本人の平均寿命も男で75歳、女で80歳を遂に越えた。好むと好まざるとにかかわらず、私たちはその社会に生き、老いの生活を営んでいくことになる。

それにしても、現在日本語の中で取りざたされる「老い」はあまりに暗い。

「南無輔苦離往生仏、ナムボックリオウジョウブツ」と唱える89歳の老女（『毎日新聞』87.9.29）、大岡昇平も「悲しい老人」の題で敬老の日に自殺が多いことから、敬老の日はやめたらどうかと提案し（『毎日』87.9.30夕刊）、9月は特に暗い悲惨な老人のニュースが新聞に取り上げられる。『朝日新聞』は、老人ホーム松寿園の火災で焼け出された老人を追って「老いまどう」のタイトルのものとシリーズを組んだ。「まどう」を構成部分とする複合動詞には「思いまどう」「逃げまどう」があるが、「老いまどう」は従来はなかった。老人の実態を言い当てたうまい造語だと感心する一方、暗胆たる気分させる造語でもある。こうした日常目にふれるものでみるかぎり、現在の日本語の中で、老いを表現する語彙は、明るく楽しい老いを表現するものよりも暗く悲しいものの方が多い。一方で80歳を過ぎて歌集を出版した婦人、90歳で富士山に登った老人など元気に活躍する老人の紹介もあるが、それは特に目立つから取りあげられるのであってより多くの老人の実情とは離れているように思われる。

老いを表わすことばが暗く悲惨なのは、社会の中で老いの占める位置や状況がしからしむところであろうが、逆に老いをとらえる意識にもよるのではないか。老人のおかれた位置から必然的に暗い悲惨なという表現が出てくるのは事実としても、老いというものを、積極的に肯定的にみるようにするという意識の変革によってもまた老いの位置づけは変わってくるのではないかと思う。

これほど長く生きようになったのは歴史上にもなかったことで、歴史に範を求めるのは無理かもしれない。しかし、かつて寿命は短かったにせよ、老いはあ

ったし、それを生きた人たちはいた。その人たちがどのように遇されていたのか、ふり返ってみたい。そこで、もし現在の老いの状況と異なるいい面がみられたら、それは現在を生きるものにも何らかの励みや参考になるのではないか。いや、私はこの問題に関しては社会のため、皆のためになるから というような善意や啓蒙心をもっているのではない。私自身が老いを明るく楽しく生きたい、そのためにいいモデルがあったら何でも参考にしたい、という非常に個人的な願いと興味から発した問題意識なのである。

先人たちの老いを知るといっても古今東西の万巻の書のどれをひもとけば効果的に要領よく老いの実態を知りうるか。資料はいくらでもあるだけに何を当面の対象とするかが難しい。今回は小手調べに①昔話と②『醒睡笑』に当たってみることにした。この二つを選んだのは、

①昔話は時代を限らず、また地域を限らず語り伝えられてきたものであるから、日本人の一般的普遍的な見方が投影されているのではないと思われる。

②『醒睡笑』は江戸初期の飾りけのない庶民像が（筆者が僧侶であったことから登場人物に僧が多いのが一般性の面でやや偏るが）窺われる。

の理由からである。これが私の目的とする先人たちの老いの実態を把握するのに適当かどうか、もっといい対象がいくらでもあろうことは承知の上で、今回とりあえず、調べを進めてみた。これはしたがって、試論であり、私の「老いを表わすことば」の序論の前段階に位置づけられるものである。

(1) 昔話に表われる老人像

『日本昔話大成』（関敬吾 角川書店 S.53）4巻～9巻に収められた約450話（ヴァリエーションがあるので概数）の昔話で老人像をさぐってみた。今回対象とした昔話中に登場する老人の数は男性（おじいさん、じい、じさなどとして出てくる）85名、女性73名であった。（初めは老婆でも殺してみたら狸だった、というような動物の化身は省く）

A. 以上の人物がどのように描かれているかを属性の面から見ると次のようなタイプに分けられる。

(1) 良い（正直な）老人

〔例〕①昔あるところに、うんと賢い孫と人のよい爺注(1)があった。(521「殿様と小僧」)注(2)

(2) 情深い(やさしい、信心深い) 老人

②山里に情深いお婆さんが住んでいた。腰の折れた雀をあわれに思い好きな餌などをやってかわいがった。(192「腰折れ雀」)

(3) 勤勉な(丹精こめた、まめな) 老人

③俺あ、この年までよく働いたから……。 (383「後生を買う」)

(4) 物知りの(利口な、機転のきく) 老人

④「爺おじさま様爺様突然に物たずね申し上げます。友だちが馬にされた。こういうことは爺様のような年の人でなければわからん。どうしたら元の人間に戻せるか教えてくれ」爺は「よしよし教えてやる…茄子七つ取ってきて食わせればよい」(250「旅人馬」)

(5) 欲深い(ケチな) 老人

⑤隣の欲たがり爺は地藏さまが教えんうちに鶏の真似をした。(184「地藏浄土」)

(6) 悪い(いじ悪の) 老人

⑥隣の悪いばあさん火を借りに来て、へらの話をきいた。(196「見るなの座敷」)

(7) つむじ曲がりの(むずかしい) 老人

⑦彦一ん村へ金作ちゅうとちえんつむじ曲がりん年寄りが居っちのう。人が山ちいや川ちゅう、右ちいや左ちゅう。(510「彦一の頓智」)

(8) 淋しい(あわれな) 老人

⑧ある田舎に爺さんと婆さんとおらしたちゅうもん。そのうちに爺さんがふと死なしたけん、婆さんは悲しさに仏に参ってばかりおらしたってな。(382「鼠経」)

(9) 愚かな(滑稽な、早とちりの) 老人

⑨作兵衛という爺さん、帰りに宿屋を忘れないように、庭先に寝ていた犬を目標にして出ていった。見物を終え宿に帰ろうとして犬の寝ている宿屋を探したがどこの宿屋にも犬はいなかった。(309 A「犬の目標」)

(10) おしゃべりの老人

⑩隣のへちゃくちゃ（饒舌）婆んばは爺に真似させる。（195「猿地藏」）

(11) 白髪の（白ヒゲの）老人

⑪近寄ってみるとそこに白髪の爺さんが杖をついて立っていて、（新話型－C「大飯食いと山神講」）

(12) しわだらけの老人

⑫運の悪いことにゃ美しい嫁ごの向こうで同じようにお参りしていた皺まるけのお婆さんにほれ葉がかかってしまった。（391「ほれ葉」）

(13) 耳の遠い（つんぼの）老人

⑬爺さんと婆さんがあった。婆さんは耳が遠かった。（414 H「聞き違い、金 は天子様」）

(14) 酒飲みの老人

⑭丹蔵ていう酒飲み爺さまいだった。（468「隠れ簀笠」）

(15) 金持ちの老人

⑮隣の悪いお爺の夫婦は、小金をため、良い爺の貧乏を馬鹿にしていた。
（226「黄金の斧」）

(16) 貧乏な老人

⑯軒端に葺く茅こさえ一本もない爺さまと婆さまあった。（203「笠地藏」）

以上の属性を次のように整理し、その属性として描かれた人物数を示す。

	属 性	爺	婆	計
性格・能力に関するもの	(1) 良い・正直な	10	3	13
	(2) 情深い・やさしい	7	9	16
	(3) 勤勉な	4	3	7
	(4) 物知りの・利口な	2	1	3
	(5) 欲深い・ケチな	12	8	20
	(6) 悪い・いじ悪の	5	6	11
	(7) つむじ曲がりの	2	1	3
	(8) 淋しい・哀れな	3	3	6
	(9) 愚かな・滑稽な	5	1	6
	(10) おしゃべり	0	2	2
肉体的条件	(11) 白髪・白ヒゲの	4	2	6
	(12) 皺の多い	0	1	1
	(13) 耳の遠い・つんぼの	4	2	6
	(14) 酒飲みの	1	0	1
状況	(15) 金持ちの	3	1	4
	(16) 貧乏な	5	3	8
計		67	46	113

これらの属性は、肉体的条件以外では、老人に限らないもので、特に老人だから顕著な性質としてあらわれているものではない。このうち、白ヒゲ、皺など肉体的条件として老人を規定したものは全体の11.5%である。(表の「酒飲みの」は肉体的条件の一つではあるが、老人を規定したものでないから省いて計算した)

性格面でも、しいて言えばつむじ曲がりという性質は老人に多いものかもしれないが老人固有のものではない。

次にこれらの性格面でプラス評価とマイナス評価のものの比率をみてみると、

プラス (1) (2) (3) (4) 39 44.8%

マイナス (5) (6) (7) (8) (9) (10) 48 55.2%

で、マイナス評価のものの方がやや多い。

(注1) 下線は遠藤がつけた。

引用は、『日本昔話大成』も方言そのままのと、翻案したものもあるが、短い場合はそのまま、長い場合は遠藤が要約した。

(注2) 521などの数字は『日本昔話大成』の通し番号。

B. 老人のどのような行為が描かれているか。

次に、昔話に登場する人物がどのような行為をするか、そこに老人としての特性がうかがわれるかどうかみてみたい。

I 労働としての行為

爺		婆	
木を伐る	2	川で洗濯をする	3
柴を刈る	3	瓶を洗う	1
薪を取る	1	貝をとる	1
屋根を葺く	1	畑仕事をする	1
橋を架ける	1	糸を紡ぐ	3
柴を売る	1	芋を洗う	1
炭を売る	1		
門松を売る	1		
畑仕事をする	2		
田を打つ	1		
葱を掘る	1		

⑰半四郎というつんぼの爺さんがあった。あるとき孫娘とともに葱畑に葱を掘りに行った。(414 F「聞き違い、火事は遠い」)

⑱あるところに婆があったと。ある日川へ大瓶を洗いに行った。(414 G「聞きちがいが、焼きがよい」)

II 相手とのやりとりを伴う行為

爺		婆	
尋ねる	1	かわいがる	1
謝る	1	いじめる	2
教える	6	教える	6
宿をかす	1	聞き違える	3
だまされる	1	謝る	1
聞き違える	5		
なぞをかける	1		

①⑨そこの爺さんがまたなかなかの謎かけが好きでさっそく二人掛け合うことになった。（517 B「謎昔」）

②⑩婆が川で芋を洗っているの侍がここは何というところかと尋ねた。婆は洗っている芋だと思って「これはところではない。すり芋です」と答えた。
（414 A「聞き違い、お村」）

III 相手に対する一方的な行為

爺		婆	
犬を殺す	1	介抱する	1
姥を殺す	1	助ける	2
子供を救う	1	雀の舌を切る	1
女をとじこめる	1	仏に参る	1
花を咲かせる	1	願をかける	1
狐を助ける	1	追う	4
願をかける	1		

②⑪（ほれ葉がかかった）皺まるけの婆さんがつつと立って番頭さんの方へやってくる。汚い老婆さんが腰を曲げてどんどん番頭さんをぼって来る。（391「ほれ葉」）

②子の持だね爺と婆いだけど。なんぼ願ったたても子が授からねもんで神様さ、
願ばかげだど。（469「鼻高扇」）

Ⅳ 登場人物の単独行為

爺		婆	
怒鳴る	1	泣く	2
魚を釣る	1	飯をたく	1
うすを作る	1	にげる	1
おどる	1	食べる	2
食べる	2	折る	1
泣く	1	旅に出る	1
堀る	1	もぐりこむ	1
屁をする	5	見破る	1
旅に出る	1	大戸を背負う	1
酒を飲む	1	夫に化けた狐を背負う	1
走る	1		
荷物を背負う	1		

③隣から餅を七つもらった。喜んで一つ目を爺が取る、婆も取ってペロリと食った。（497「無言較べ」）

④一文なしになりどこかへ行って働こうと爺さんは荷物を背負い、婆さんには大戸一枚背負わせて旅に出た。（414 A「聞き違い、金は天子様」）

こうしてみると、昔話に登場する老人達は肉体的にも精神的にも活発な行動を取っていることがわかる。「走る」「追っかける」「大戸を背負う」など今日の老人像からは想像もつかないほどの元気さである。何歳から老人とするとか、今日の年齢と昔の年齢と同一視できないとか、議論の余地はあるが、ここでは昔話の中で爺様、婆様、年とりなどと表現されたものをそのまま老人と受けとめて進める。

こうした行為でみるかぎり、昔話の老人たちは社会の中でも確固たる地位を占め、普通の成人と同じ扱いを受けていたように思われる。老人自身にも老人だからとの甘えは許されなかったのであろうし、それぞれ活力の続くかぎり生き生きと活動していたようにみえる。もっとも現在より短命で、老いを迎える以前に死んでいった方が多く、活力のある老人だけが残った、ということかもしれない。

ともあれ、昔話の老人たちは、良いとか情深いと評価されるより、いじ悪、欲深いと評価される方がやや多いが、これも活力、積極性の表れとみることができる。この種の人物は情深い、良いと評価できるものより10%多いが、どちらにも元気な老人が活躍している。

(2) 『醒睡笑』に登場する老人像

昔話の場合と同じように、作品に登場する人物がどのように規定されているかと、それらの人物がどのような行為をするのかを調べてみた。『醒睡笑』はほとんどが短い笑話で、昔話でみるほどには、人物の属性は表現されていない。岩波文庫本『醒睡笑』解説で鈴木棠三氏も述べているとおり「笑話は『物語』とは違う。主人公や副主人公の紹介を、一々或所に何兵衛という男がいた、というふうに物語的に述べるのでは気が抜けてしまう。主人公や副主人公はいきなり登場して、思いもかけぬことを言い出したり、やらかしたりする」のであってどのような人物かの説明はほとんどない。あるのは次のようなものである。(岩波文庫『醒睡笑上・下』1986年7月による)

㉔東西をわきまへざる男、六十に近づき(上 p.120)

㉕よぼよぼと入る老人(上 p.143)

㉖六十ばかりのいかにも分別かしこ顔の(上 p.185)

㉗勇猛精神なる老僧(上 p.249)

㉘さしもたつき老僧のもとへ(上 p.250)

㉙ことさらかたくなる姥(上 p.295)

㉚文好む人(上 p.309)

㉛痩せ黒みて白髪たる抖擻の僧(上 p.369)

㉜世に聞えたる有徳の婦人(下 p.118)

㊤殊勝なる長老（下 p.169）

㊦姥あり、天然作意、うまれつきて、かすり、秀句をいふに上手なり。

（下 p.225）

『醒睡笑』には1,003編の笑話が収められ、その中に何らかの役割で登場する老人の数は男性53（内、僧26）女性18（内、比丘尼1）の計71名である。その71名の人物の中で上記11例が具体的にその人物を説明されているにすぎない。

この11例で老人がどう評価されているかをみると、㊤㊦㊧は無分別、老弱、頑固などプラス評価ではないが、残る8例では尊敬し、賛美された老人像である。

次にここに登場する老人たちの行為、状態をみる。笑話であるから失敗したり、機知に富んだやりとりをしたり、というのが多く、昔話にみたような肉体を用いての行為というのはあまり出てこない。また、個々の行為を経てどういう結果になったか、どう落ちがつくか、が問題になるものが多いので、それらについては老人の行為そのものより、その行為の意味づけでまとめてみる。

(1) 子をもうけて喜ぶ

㊨年八旬にあまり、はじめて男子をまうけ悦びかぎりなし。（「千代もは人の子」上 p.124）

(2) 嫁入りをする

㊩七十に近き姥あり、似合ひたる者の方へ嫁入りをする。（「何事にも門祝」下 p.49）

(3) 年をかくす

㊪老人あり、わが年をかくして「いくつ」と問へど、ついにいはず……「なにの年」と問ふ時「狼の年」とこたへたり。（「狼年の生まれ」下 p.104）

(4) 引退する

㊫板倉伊賀守殿齡七旬に余れば、功名かなひとげて身を退き……（「板倉政談その九」上 p.269）

(5) 家族への言動（教える、愛する、嘆く）

- ④⑩鍛冶屋の土佐といふ者、年の暮に孫の七つ八つなるを近付け、「元日にわが顔を見、『日本の鉄床はみな爺の鉄床』といへ」と教へし。あくる朝、孫「日本のかなしみは、みな爺のかなしみや」といへり。（「日本の悲しみは爺の悲しみ」上 p.113）

(6) 泣く

- ④⑪「なにもわが聞きわけたることはなかりし。隣のかかのあめやさめと泣かるほどに定めてあしきことではあるまいと思うて泣いた」（「人が泣くから泣いただけ」上 p.316）

(7) 誤解する（驚く）

- ④⑫（法談が終わっても立たない男に）道心者の老いたるが、あながちに感じ思ふ。男に問ひたれば「あまり長談議にしびれがきれて立たれぬは」というた。（「しびれがきれて立てぬ」下 p.72）

(8) 才知、機転を示す

- ④⑬東野州常縁の前に宗祇ゐたまひしを「いくつにならるるぞや」と尋ねたまへば、とりあへず、「入道は六十三にまかりなる」と申されし時に、野州、紫竹の竹のよはひながさよ。（「七九の竹の齢」下 p.210）

(9) 無知を示す

- ④⑭（門跡が輿からおりて住吉明神に手を合わせているのをみて）ひとりの姥、「あの住吉といふお人はなにとしたお人やら。本願寺さまへお輿からおりて拝ませられた」（「住吉というお人」上 p.328）

(10) 忘れる

- ④⑮ある長老の、施主の高悦といふ二字の内一字をよみ忘れ、「施主高、施主高」と何遍もいひて、あげくに「施主高よろこぶ」といはれしも、健忘の病なるべし（「施主の名を忘れる」上 p.146）

(11) 腹を立てる

- ④⑯（突然打たれて）かの老人大いに腹を立ち、「いづくのうつけめぞ、是非はりかへさん」とわめくが（「張り返すは田舎者」上 p.142）

(12) 嫉妬する

- ④⑦ (夫に先立たれ嘆き続けていた老婆に隣の人が、善光寺へ参りあなたの亡夫にあったが三途河の姥と夫婦になっていた。と語ったところ) 姥忽ち気色かはり、杖を持ちて十王堂に走り「あら憎のうばが、人の男を取りたるや」と、木につくりたる形をさへたたきて、恨み恨みてたたきごとは。(「三途河姥が恋がたき」下 p.50)

(13) 遊ぶ

- ④⑧ 老僧、小僧、児、若衆いひ合はせて随意講のまはし始めり(「随意講には叱らぬはず」下 p.30)

(14) 悟る

- ④⑨ 桑名の寺の住持、秀海長老は七日以前より死期を弁じ、春の時正法説の後、十念を授け、高座にありながら合掌して命終す。(「忘れぬ先に褒める」上 p.322)

- (15) その他、問う、負け惜しみする、節儉する、語る、参るなど。

以上の行為をまとめてみる。

老爺 (僧)		老婆	
a. 子をもうける	1	a. 嫁に行く	1
b. 年をかくす	1	b. 泣く	3
c. 引退する	1	c. 家族へ語る	2
d. 家族へ語る	8	d. 誤解する	2
e. 泣く	3	e. 才知・機転を示す	1
f. 誤解する	5	f. 無知を示す	2
g. 才知・機転を示す	12	g. 腹を立てる	1
h. 無知を示す	3	h. 嫉妬する	1
i. 忘れる	3	i. 遊ぶ	1
j. 腹を立てる	2	j. その他	2
k. 遊ぶ	3		
l. 悟る	4		
m. その他	5		

『醒睡笑』の性質から、老爺の側でg、老婆の側のeの才知・機転をきかした老人の例が多く、誤解とか無知を笑う話が多いことから、その行為者としての老人も多く登場している。その他では、80歳にして子をもつ、70歳にして嫁に行くなど老人一般からみれば珍しい人物も登場する。これらの例は少ないが、こうした人物も登場させていることは、老人に対する考え方が柔軟であったことを窺わせる。つまり、老人だからとか老人のくせにとかの非難や粹づけがそれほど厳しくなかったのではないかと思われるのである。逆にみれば、そうした例が非常に珍しかった証拠とともれるが、それは現在でも珍しいことで、その珍しいことのとりの上げ方が、否定的か肯定的かが異なる。『醒睡笑』ではそれを特に目録たてることなくサラリと書いている。

老人らしい行為としては、c.「引退する」、i.「忘れる」、l.「悟る」などの行為があるが、その他の行為は年齢にかかわらず行われるものばかりである。

笑話という性質もあるが、いわゆる老人らしい行為をする老人も、あっさりと描かれている。暗い悲しいというイメージはここにはない。

— お わ り に —

はじめに断ったとおり、まだ緒口にすぎず模索の過程であるが、この二つの対象でみる限り、昔の老人たちは、現在の老人より多様で、活気に満ちていたように思う。うば捨てのような悲惨な事実もあったけれど、現在ほど陰湿でなかったのではないか。

もっとも、どちらが悲惨で陰湿であったか、あるいはどちらの老人がより幸せに暮せたか、それを判断するには、昔の社会の実態を知らなければならず、まだまだ調査も研究も不十分である。先人たちの老後の実態を伝えることばをもっともっと調べ、また、現在の老いを表わすことばを適切にまとめ上げた上で比較しなければ結論は出せない。今後しばらくこれらの課題に取りくんでいきたいと考えている。